

花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記3

国立市立国立第七小学校

平成27年4月28日 NO.12 (212)



カラスノエンドウ

オー君 「あ！この花は見たことあるよ。」

花ちゃん 「そうね。あちこちで見られるわ。校舎の北の畑のあちこちに生えているわ。」

オー君 「よく見ると、きれいな花だね。」

花ちゃん 「そうね。ピンク色していて、チョウチョのような形ね。」

モンタ博士 「オー君。この花をよく見てごらん。何か気がつくことはないかな。」

オー君 「ふーむ。花がピンと上に立ちあがっている……。そうか、謎はとけた！

この立っている花は虫たちに蜜のありかを知らせるためにあるんだ。」

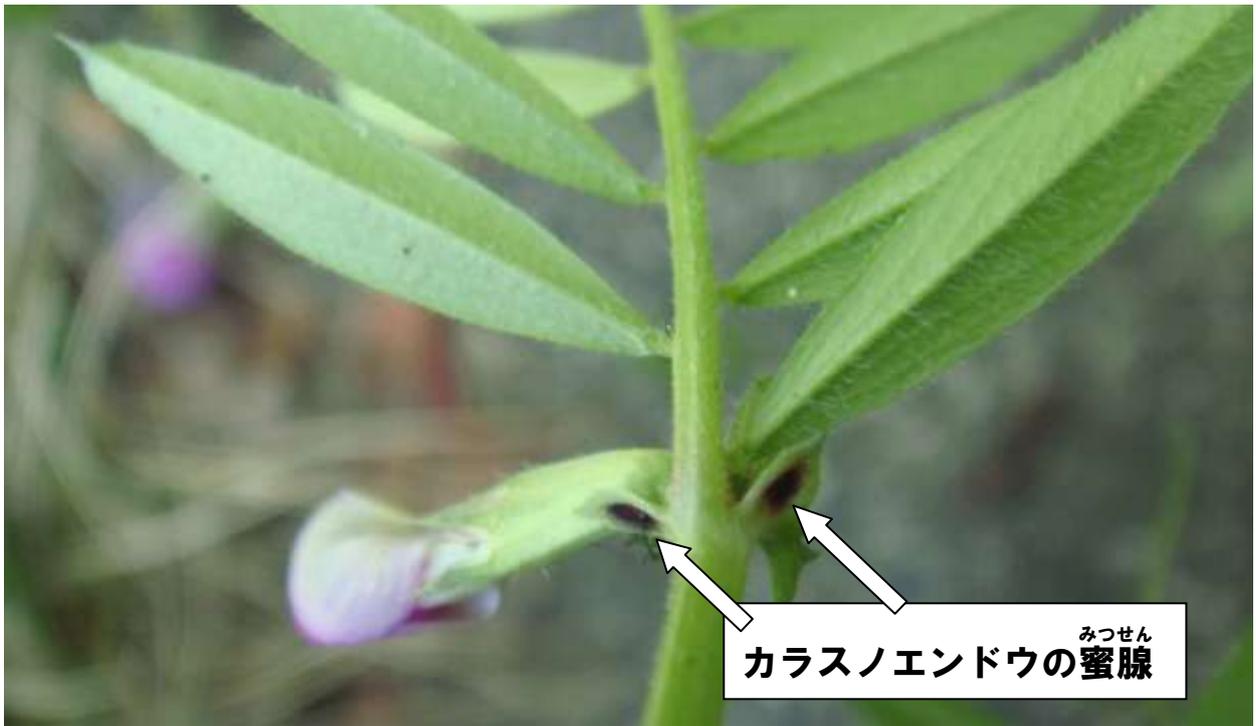
モンタ博士 「そのとおり。目じるしなんだね。ハナバチなどがやってきて、足で下の花び

らを押し下げると、おしべやめしべが出てきて、花の奥にある蜜をもらう代

わりに、ハナバチのおなかに花粉をつけて運んでもらうのさ。」

花ちゃん 「小さな花なのに、いろいろとひみつがあるんですね。感心します。」

モンタ博士 「それからね、次の写真は何か。葉のつけ根に黒いものがあるよ。」



オー君 「何だろう？。まったくちんぷんかんぷんです。」

モンタ博士「この黒いのは、蜜を出す『蜜腺』というものなんだ。」

花ちゃん 「蜜は、虫を呼びよせるために花の中にあるのでは・・・？」

モンタ博士「ところがどっこい。カラスノエンドウは、花の外で蜜を出しているのさ。」

花ちゃん 「なぜ、そんなことをするのですか。」

モンタ博士「それはね、アリの呼びよせるためなのさ。」

オー君 「そうか！アリは甘い蜜を求めてカラスノエンドウにやってきて、そのアリがカラスノエンドウの茎や葉を食べようとする害虫を、追っばらってくれるんですね。」

モンタ博士「その通りだ。アリは蜜をもらったお礼に、カラスノエンドウのガードマン・用心棒になっているということなのさ。」

花ちゃん 「小さな花なのに、いろいろとひみつがあるんですね。感心ですね。」

ところが、このお話まだまだ続編があり！

このガードマン・用心棒を寝返らせる害虫としてアブラムシが登場するのである。アブラムシはアリマキと言われるくらいアリとは仲良しで、アブラムシはお尻から甘い蜜を出し、アリはその蜜を吸う代わりにアブラムシを天敵から守るのである。しかし、ここでよく考えると、この甘い蜜というのは、もともとはカラスノエンドウという植物が葉で作った糖分である。最強のアリ軍団を誘い、守備隊にしようともくろんだように見えるが、さにあらず……。このアリたちが守っているのは、カラスノエンドウではなく、そのカラスノエンドウに寄生して栄養である糖分を掠め取っている大量のアブラムシたちなのだ。本当にまあ、生き物の世界は摩訶不思議！